台湾における皇民化運動

—— 政策の形成と短歌の広がり

Yenhung LAI (賴衍宏 : Associate Professor Department of Japanese Language and Literature,
Providence University)
✉ enko@hotmail.com

(台湾) 靜宜大学日本語文学系副教授。比較文学。主著に『日本文学管見』(新北：尚昂文化 2015)、「法隆寺薬師仏光背銘新論」(『日本研究』第58集, 2018)、「『沙拉記念日』の中譯問題」(『靜宜語文論叢』第12-1号, 2019) など。

The Kominka Movement in Taiwan

: Policy Formulation and the Spread of the Tanka

It is generally believed that the Kominka movement in Taiwan started between the late 1930s and 1945. There have been numerous discussions of its origins and its significance, based on the historical records of the Governor's administration at that time. However, much has been overlooked in these debates, because the starting point of the movement has been misguidedly set too late, while its end point has been set too early. More importantly, generally the initial proponents of the movement have not been accurately identified. As a result, these discussions have brushed past some of the core dimensions of the movement, leading to the misconception that Komin literature consisted merely of Komin novels. This paper argues that for the purpose of setting the record straight, it is important to recognize the role of the tanka genre in the Kominka movement from the early 1930s to the postwar period.

Keywords Kamada Seii (鎌田正威), Epitaph (墓誌銘), Tsuchiya Yonekichi (土屋米吉), Political Manipulation (政治利用), Honkadori (本歌取)

1 はじめに

皇民化運動については、1930年代後半から1945年まで展開したとされている。それを政策として採用した総督の施政年表に基づいて論じていく業績は枚挙に遑がない。しかし、見落としが生じがちである。なぜなら、その上限は遅きに失するし、下限も早きに失する恐れがあるからである。重要なのは、その最初の主唱者が特定されないままでは、運動の核心を捉えられないということである。また、皇民文学は皇民小説だけからなるという偏った認識も横行している。それを是正するためには、短歌ジャンルという新しい視点が有効である。ここでは、1930年代前半～戦後にわたって展開した皇民化運動と皇民短歌との実体を追跡してみたい。

2 「皇民」の起源

日本の六国史における「皇民」の用例を検討する際に、いま重視すべきなのは、東北地方の「夷虜」の「乱」を平定すべく、近隣する「皇民」の兵制を見直そうとする桓武天皇の発した『続日本紀』¹延暦二年(783)六月辛亥条の勅であろう。

今聞、坂東諸国、属有軍役、每多延弱、全不堪戦。(略)同曰皇民、豈合如此。宜仰坂東八国、簡取所有散位子、郡司子弟、及浮宕等類、身堪軍士者、(略)專習用兵之道、並備身装。

これを分析した森清人²によると、「明らかに国民皆兵の趣旨を宣はせられたものでありましてわが兵制史上注目すべき詔勅であると信じます」と正しく位置づけられている。換言すれば、「皇民」発言の原点は皆兵制の予告だったのである。戦雲みなぎる1931～1945年の東アジア情勢を眺めると、「従来の「同化」政策と異なり、「皇民化」は異民族である台湾人を「天皇の赤子」として、自らの戦争に動員することを最大の目的とした運動であった」という星名宏修³の卓見を想起すれば、中央政府が外敵の圧力に晒されていて、植民地側も何らかの形で動員に応じねばならないことが分かる。結局、八世紀の「皇民」勅語が二十世紀の政策制定者によって採用された当初、血税を払うべき兵力動員を要求しようとする最終目標がすでに含まれていたといえよう。

¹ 青木和夫ほか校注『続日本紀五』(岩波書店、1998)、p.272.

² 『教育勅語謹話』(直霊、1943)、p.20.

³ 「「大東亜共栄圏」の台湾作家―「皇民文学」のかたち・陳火泉」(『野草』第46号、1990.8).

3 万葉歌の政治利用

「皇民」意識を昂揚させるためには、どうすればよいのだろうか。一対策として打ち出されたのは、『万葉集』から皇民性のある古歌を見出して、その考え方を被支配者に植えつけることであろう。これについて、山崎馨⁴は「万葉集もまた、一部の歌が昭和の軍国主義に利用されるところとなり」と道破したうえ、そのうち万葉集の歌「御民われ」「海行かば」および「今日よりは」の三首を取り上げている。それを参考にして管見を述べると、1931~1945年の間に政治的に996歌・4094歌・4373歌の万葉三首を利用すれば、台湾人を動員に応じる「皇民」へと脱皮させ易くなるだろうということである。

まず、996歌「御民吾 生有^ミ駿在 天地之 榮時^ミ尔 相樂念者」は「皇民」短歌の古例として利用されていた。『万葉集』の本文には「皇民」の字面は一つもない。にもかかわらず、なぜ996歌は「皇民」短歌代表作と追認されているのだろうか。それを可能にしたのは訓読の回路にほかならない。そのために、三つの論拠があるだろう。

一つ目は、記紀冒頭の神名について本居宣長⁵が付けた注釈である。それによると、「皇てふ一言多し」と説明している。注目に値するのは、接頭語「皇」の用法である。二つ目は、亡き天武天皇のために持統天皇の詠んだ挽歌(162歌)の原文に「高照 日之皇子」と「高照 日之御子」という二節がある。佐竹昭広(他著)『万葉集 本文篇』⁶を見ると、「皇子」「御子」とも「みこ」というルビが付けてある。佐竹昭広(他著)『万葉集 訳文篇』⁷を見ても、「皇子」が「御子」に翻訳されている。即ち、原文のレベルとして持統天皇はすでに「皇子」=「御子」の関係性を示唆しており、訓読のレベルとして学者は二つの単語を同一視している。翻訳のレベルに至っても「御子」で統一表記されているのである。三つ目は、「御民」について、「み民」は「御」の字が書かれてゐるやうに、尊称の接頭語として用ゐられ、「皇民」の如き意である」という澤瀉久孝の注⁸がある。接辞・歌言葉・注釈の成果を参考にしたら、「御民吾」=「^ミ皇民吾」という同義関係が導き出しうるだろう。

実際、その一例は台湾三成協会の刊行した旬刊に加藤武雄の「皇民我生けるしるしあり」⁹という標題に現われている。台湾読者の眼前に、996歌が「皇民」短歌として躍り出たのである。もう一例は、996歌を鑑賞した齋藤瀏による「^ミ実に^ミ御民吾とは、^ミ皇民の誇り^ミであり」¹⁰という書き方である。日本内地の読書市場で996「皇民」歌が市民権を得ていたといえよう。

4 山崎馨「万葉集歌三首贅注」(犬養孝博士古稀記念論集刊行委員会編『万葉・その後：犬養孝博士古稀記念論集』東京：塙書房、1980)、p.232.

5 大野晋ほか編集校訂『本居宣長全集』第九巻(筑摩書房、1968)、p.129.

6 佐竹昭広(他著)『万葉集』本文篇(塙書房、1998年補訂版)、p.28.

7 佐竹昭広(他著)『万葉集』訳文篇(塙書房、1972)、p.32.

8 『万葉集注釈巻第1』(中央公論社、1957)、p.336.

9 加藤武雄の「皇民我生けるしるしあり」(『誠』第303号、1938.2.20.).

10 齋藤瀏『万葉のこころ』(朝日新聞社、1942)、p.66.

「皇民化運動」が勢いを増すにつれて、当然ながらマスコミにも影響を及ぼしていく。その端的な一例は、「本社発行国語新聞を皇民新聞と改題」(『台湾日日新報』1942.2.13 朝刊)である。新聞紙名が「国語」から「皇民」に変更される事自体が、すでに「皇民化」の具体化が済んでいることを意味する。その時に以下の説明が付け加えられている。

本社発行の国語新聞は二月十一日の紀元節を期して、『皇民新聞』と改題し『みたましんぶん』と称することになった、島民も大君の大御宝であり世界に比類なき皇民であり御民であるとの皇民意識を昂揚せんが為めこの改題となつたものである

社告のついでに、「皇民」＝「御民」という996歌の同訓同義語に関する機会教育が行なわれたのである。

やがて、そうした動きは教育現場にも浸透していった。1943年に台中一中を卒業した鄭垠耀の短歌「皇民われ」と台湾人も歌はされ武装の中学生演習場駆ける」¹¹がある。「皇民」短歌が軍事訓練の時に歌い継がれていったので、996歌は皇民意識をアップさせる役割を果たしていたことが見て取れる。

次いで、今奉部与曾布の一字一音式仮名書きの原表記が「今日よりはかへり見なくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」¹²と読み下されている。訳文の過程で浮上した「御楯」は、「御」＝「皇」という公式に従えば「皇楯」という造語が獲得できるはずである。実際、帝国在郷軍人会台湾支部が発行した雑誌を見ると、「帝国在郷軍人会創立三十周年記念式典に於ける総務口演の要旨」¹³に「国策の嚮ふ所に順応し」、「戦友」と「我が家」という二誌が新しく「皇楯」に変更されることが伝えられている。東京の軍人会館図書部により、1940年1月から「皇楯」誌が発行されたことが確かめられる。台湾の場合、「大溪皇楯隊十八日に結成式」(『台湾日日新報』1941.9.5、朝刊)に注目すべきである。「志願兵志願者の予備訓練と更に一般に対する皇民錬成とを目的として有志が自発的に大溪皇楯隊結成を計画」という記事からすれば、真の志願兵になれた台湾青年は紛れもなく「皇楯」といえる。

このように、訓読みに支えられて御民＝皇民、御楯＝皇楯という異形同語の関係が次々と確立されていった。996歌を利用すれば、「皇民」短歌が手に入る。これは人民の自覚向上を錬成するための皇民化運動にとって好都合な万葉歌といえる。4373歌を利用すれば、「皇楯」短歌が手に入る。その「可敵里見奈久豆(返り見なくて)は、4094歌の「可敵里見波 勢自(かへり見はせじ)と共通した決意が認められる。だから、4094歌の「大皇乃 敵尔許曾死米(大君の辺にこそ死なめ)とともに宣伝すれば、昭和天皇のために犠牲を厭わない兵士を錬成すべき皇民化運動にとって好都合な万葉歌といえる。

11 孤蓬万里編著『台湾万葉集』(集英社、1994)、pp.104-105.

12 注7、p.511.

13 記手不明「帝国在郷軍人会創立三十周年記念式典に於ける総務口演の要旨」(『南の鎮め』第171号、1941.1).

4 台湾歌人の「皇民化」献策

【図1】鎌田正威¹⁴

台湾における「皇民化」の最初の用例については、従来、歴史研究側から指摘がなされてきた。蔡錦堂¹⁵の「1936年8月4日」説が知られる。それに対して、筆者は博士論文¹⁶で「1935年に「スメラミタミ化」「皇民化」が短歌結社「八雲」系に主張されていた」ことを指摘して、旧説を乗り越えた。ただ「皇民化」思想形成の一部始終を深く追求する余裕はなかった。より徹底的に調査する前に、「文官総督時代にその対台湾人抑圧の手ぬるさ、コロント権保護の不十分さをかこって蠢動していた在台日本人ファッショ分子の待望した武官総督のもとでの「皇民化」運動があれくるうこととなる」¹⁷という見通し方は有益だが、惜しむらくは主唱者が誰なのかまだ提示されていないことだ。

管見によると、その提案者として台湾歌人鎌田正威を挙げるべきだろう。

1935年11月22日に行なわれた市街庄会議総選挙を阻止すべく、土屋米吉『台湾第一回選挙の考察』¹⁸によると、「皇紀二五九四年十一月十日」付で、「鎌田正威氏、土屋米吉氏」らが「地方自治制改正反対運動建白書」を岡田総理大臣に送り届けた、という。その趣旨は、次の通りである。

- (1)「我々島民ハ国防上ノ立場ヨリ台湾総督ノ現在ノ態度ニハ反対スル者ニ御座候(略)台湾統治ノ第一目的ハ漢民族ヲ皇民化スルコトト存シ候」
- (2)「台湾統治ノ指導精神ヲ皇民化主義トシ自治主義ヲ撤廃スル事」
- (3)「母国人ニテモ先住民以下タル者モ数多キヲ認ムレト(略)昨今ノ台湾ニ於テハ経済力ノ退化(略)遂ニハ母国人ノ湾化ヲ要求スル実情ニ有之候(略)先住民ヲシテ皇民化スル事ニ一路猛進スヘキト存シ候」

そのうち、(1)の論調は国防の立場から「皇民化」を進めるべきとして参政権を本島人に付与する文官総督の姿勢を批判している。(2)も「皇民化主義」を持ち出して文官総督の

¹⁴ 「神道の精神に基く維新社を創設する二年間東京で精進の鎌田正威氏が此の程帰台」(『台湾日日新報』1933.10.18, 朝刊)

¹⁵ 「再論「皇民化運動」」(『淡江史学』第18号, 2007.9.)

¹⁶ 頼衍宏『日本語時代の台湾短歌——結社を中心にした資料研究』(東京大学, 2008), p.279.

¹⁷ 若林正丈「大正デモクラシーと台湾議會設置請願運動」(春山明哲ほか編『日本植民地主義の政治的展開：その統治体制と台湾の民族運動 一八九五-一九三四年』東京：アジア政経学会, 1980), p.229.

¹⁸ 土屋米吉『台湾第一回選挙の考察』(普泉社, 1936第二版), pp.274-278, p.283.

自治主義を非難している。(3)は経済的に劣勢へと転落しつつある日本人が台湾化される危機に脅かされるため、「皇民化」を急ピッチで着手すべきだという献言である。再三再四「皇民化」を繰り返しているこの1934年の建白書こそ、現存する文献上における「皇民化」の初出だったといえよう。

「皇民化」の由来と展開を解明する際、鎌田正威(1885～1935年)の経歴からアプローチすべきであろう。その墓誌銘¹⁹(1936年)は以下のとおりである。

(A) 東京帝国大学ヲ卒業直ニ台湾総督府ニ奉職(略)特ニ^(B)総督明石將軍ニ秘書官タルヤ熱誠献替重望ヲ荷フ此間数次海外ニ遊ヒ私費ヲ投シ危難ヲ冒シテ各地ノ文物制度ヲ探究シ貢獻スル所多シ官ヲ辞シ(略)多年ノ宿望タル神道ノ研究ニ専念シ^(C)
^(D)台湾維新社及皇政会ヲ創設惟神大道ノ宣揚ト日本精神ノ作興トニ全カヲ傾尽ス(下略)
(下線は筆者による。以下同じ)

まず、(A)に関しては東大在学中「筧克彦先生の高弟でしたから、神道に関する研究は、相当に進んで居られた」²⁰と偲ばれている。筧克彦²¹の著作を調べると、「神人合一、天皇皇民の^{てんわうくわうみん}惟神の^{かんながら}同体」という言説がある。1910年に東大を卒業した鎌田は、仮に学生時代からでない場合でも、「台北帝大で特殊講義を開講中」のため恩師が渡台した際に「筧博士歓迎会 門下生の催し」(『台湾日日新報』1930.1.11, 朝刊)という活動に参加していれば、その「皇民」説の薫陶を受けることができたはずである。

それと関連する(C)は、「世界を週遊して 日本の皇室中心主義と 日本人の特性が 世界で卓越して居る事を知つた—鎌田正威氏談」(『台湾日日新報』1927.7.1夕刊)という記事から確かめられる。それによると、「吾々日本人の自覚せねばならぬことは日本民族は其皇室中心主義の惟神道を拡充し(略)神人^{こうみん}統一して(略)皇民として必ずその実現に精進すべきである」と報じられている。換言すれば、海外を視察した後、「皇民」として惟神道を実行に移す意欲を示している。筧恩師の理論を忠実に導入する意気込みが窺取できる。

(B)の職歴を経て、鎌田は明石総督を「英雄」²²視するようになった。また、『台湾総督明石大將言行録』編集計画を立ち上げたので、それに関連する文献資料を提供するよう、台湾社会に呼びかけている²³、という。こうした明石の発言を細大漏らさず記録した鎌

19 陳恵芳「流落巷弄の石碑—鎌田正威墓誌」(『国史館臺灣文獻館電子報』第185号, 2019.8)。

20 太田秀穂「鎌田氏観」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯, 台湾維新社, 1936), p.161。

21 『風俗習慣と神ながらの実修』(春陽堂書店, 1939普及版), p.75.なお、「此の小冊子は大正五年一月より三月に至るまで、某所に於て毎週一時間宛七回になしたる講話の速記なり」(p.1)とあるので、1916年の発言だったことが分かる。

22 「明石総督の偉らさ 明石総督秘書官だつた 鎌田正威氏の話」(『台湾日日新報』1929.8.26, 朝刊)

23 「編纂明石総督言行録」(『台湾日日新報』1924.7.11, 朝刊)。原文:「鎌田正威氏。以元為明石総督秘書官關係。欲乘此時。編纂台湾総督明石大將言行録。以資感化。藉垂久遠。現正搜羅材料(略)欲寄贈材料者。宜至是日為止」

田の協力のもと、小森徳治『明石元二郎』上巻・下巻(台北：台湾日日新報社，1928)の出版が成立した。同書を調査したところ、「皇民化」の用語に近い言説として二つの看過できない箇所がある。

〈1〉親友杉山茂丸氏の進言：「台湾三百万新附の民(略)を帝国皇化の民とせらるゝを総督政治の第一急務として、歴代の総督は朝命を蒙られた訳でムい升²⁴

〈2〉新任最初の訓示：「総督の眼中には、同化不同化は問題でなく、何うあつても同化しねばならぬ。而かも異種族の同化は日本古来の国是である²⁵

明石総督が赴任する前の「皇化」と就任した後の「同化」は、まだ「皇民化」という熟語になっていない。ところが、〈2〉を引用したと思しき土屋米吉『台湾第一回選挙の考察』²⁶の次の一節を見ると、不思議にも「皇民化」が顕れてくる。

この点明石將軍はその訓辭の中に「最近同化政策ヲ疑フモノカアルカソハ大キナル誤リナリ。吾等ハ一人モ残サス台湾在住民ヲスメラミタミ化^{ママ}ザネハナラヌ」と述べてゐるが、

即ち、明石総督の「同化^{ママ}しねばならぬ」という意を述べているうちに、土屋によって「スメラミタミ化^{ママ}ザネハナラヌ」と置き換えられてしまったわけである。もう一度土屋『台湾第一回選挙の考察』²⁷の「スメラミタミ化」「皇民化」という主張を吟味すると、明らかに「皇御民化」が「皇民化」へと言い換えられている。要するに、明石総督の言行に仮託しつつ「同」を「皇民」に置換する操作を経て初めて「皇民化」という単語が成立したものとされる。その文献操作を承知したうえで、土屋とともに1934年の建白書に鎌田が署名し、首相に送付したところ、「皇民化」という用語が中央政府も共有するようになったのではないだろうか。

それに先立ち、鎌田正威が晩年総裁として活躍した「皇政会では数年来武官総督実現運動を開始し奮闘して来た」が「昭和八年十月」に「武官総督要請の建白書を中央要路に送り、当時は重大問題として当局の忌諱にふれ同志等は検束せられ、暴圧を加へられたる」²⁸と回顧されている。捕まった一人に、「土屋君も亦た検束された」²⁹と想起されている。この1933年の建白書において、先の武官総督の「皇民化」という遺志を盾にしたかどうか不明だが、実際、土屋米吉は文官総督更迭論のせいで一時的に人身の自由を失ってしまった。彼にとって、土屋米吉「大阪天神橋ホテルに催したる鎌田正威先生告別式場に於ける弔辞」によると、彼にとって、「僕に実子にまさる愛を賜ひ」「恩師鎌田正威先生」³⁰

²⁴ 小森徳治『明石元二郎』下巻(台湾日日新報社，1928)，pp.29-30.

²⁵ 小森徳治『明石元二郎』下巻(台湾日日新報社，1928)，pp.50-51.

²⁶ 注18，p.38.

²⁷ 注18，pp.7-8.

²⁸ 「皇政会の運動に就て」(皇政宣揚会編『真の叫』，皇政宣揚会，1936)，p.3.

²⁹ 永山幹事「開会の辞」(皇政宣揚会編『真の叫』，皇政宣揚会，1936)，p.52.

というように、鎌田は師父なのである。後に土屋と結婚した向山セツ子³¹も「鎌田^{ママ}先を偲び奉りて」を題にして「しま人のすめらみたまとなりぬべき日をこそ祈れみたまのまへに」を詠んでいる。これは「台湾人の皇民化すべき」心を訴えた最初の皇民化短歌といえる。鎌田の忌日(1935年8月8日)から二人が結婚するまでの1936年4月12日³²の間に成立したものである。

(D)については、鎌田の遺志を継いだ台湾維新社の森政禧だが、その「祭詞」に「台湾五百万同胞の絶対的皇民化」³³を訴え、皇政宣揚会代表である山下好太郎も「祭辞」で「島民の皇民化」³⁴を強調している。亡き鎌田の霊が安心できるように「皇民化」運動の成功のために捧げる決意を示しているわけである。墓誌銘に「皇民化」の一語をも刻まずに行間に尽くその運動を産み出す文脈を得たといえよう。

鎌田の粹組みを付度すれば、寛恩師の惟神道を実践しているうちに、その「いしん」の発音に因んで台湾維新社を創立した。また、理念が認められて皇政宣揚会にも総裁として迎えられた。台湾人をして「一視同仁の皇化に浴せしめん」と「只管島情の研究に没頭し、島民青年の誘導啓発に努力」³⁵していたことからすれば、専ら皇民化の可能性を色々と探って研究を続けていたらしい。その生存中、「啓蒙運動に従はれた」³⁶とされたとおりに、皇民化の啓蒙運動期と位置づけられる。その成果として見過ごせないのは、「台湾に於ける社会事業団体である〇〇会に建議された草案」³⁷であろう。それによると、1933年11月から「惟神之大道による神拝の修行を」経て、「既に同化の可能性と神拝の効果の顕著なることを証明せられたり」とすれば(略)、台湾には同化の道は早や既に開かれたり」としている。その過程で、鎌田は「ミソギ修行」を通じて「本島人を精神的に導いて行く」と述べ、「土屋(略)が助手として右修行に手伝ふ」³⁸という。つまり、鎌田が率先して台湾人同化の成功例を作り出した側で、土屋米吉を右腕と頼んだのである。

しかし、1936年9月に待望の武官小林総督が着任するのを俟たず、鎌田は1935年8月に他界した。本格的な皇民化政策期を迎えるためには、その精神を継承した有志家の奔走が必要である。武官総督が実現した翌月、注目に値するのは皇政宣揚会(編)『真の叫』³⁹の出版である。その中に、「小林総督への建白内容」が掲げられている。具体的には「台湾統治ニ関スル建白書」だが、「本島統治ノ根源タル島民ノ皇民化ト本島防衛ノ見地

30 太田秀穂「鎌田氏観」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯、台湾維新社、1936)、pp.266-267.

31 太田秀穂「鎌田氏観」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯、台湾維新社、1936)、p.290.

32 「土屋米吉君結婚」(『台湾日日新報』1936.4.13、朝刊).

33 編著者不明「奥津城建設報告書」(鎌田正威先生墓碑建築事務所、1936)、p.29.

34 編著者不明「奥津城建設報告書」(鎌田正威先生墓碑建築事務所、1936)、p.27.

35 法水了禅「憶鎌田正威先生」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯、台湾維新社、1936)、p.109.

36 太田秀穂「鎌田氏観」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯、台湾維新社、1936)、p.161.

37 亭々生「還り行く世相を眺めて」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯、台湾維新社、1936)、pp.145-147.

38 「本島人十名が神のミソギ修行 鎌田正威氏に導かれ 三日間北投無名庵で」(『台湾日日新報』1933.11.6、朝刊).

39 「皇政会の運動に就て」(皇政宣揚会編『真の叫』皇政宣揚会、1936)、pp.4-5.

ヨリ我等母国人ガ総テノ中枢タルヲ要スルハ言ヲ俟タス」という、内地人を優位に据えつつ台湾人を皇民化すべきという理念が開陳されている。また、「島民皇民化ノ施設徹底」として「新聞紙及其他刊行物ノ漢文ヲ禁止スルコト」などが列挙されている。そして、「総督は之が建白理由を聴取することとなり」⁴⁰とも伝えられている。やがて、請願どおりに、新聞の漢文欄⁴¹が廃され、小林総督も「島民の皇民化」をはじめとする「台湾統治方針」⁴²をメディアに公言している。

兵力動員に限っていえば、小林総督の消息によると「昭和八年頃に本島人の皇民化促進の方法として優秀な本島人青年を志願兵として軍隊に入れてはとの意見が府内にあつて、之を台湾軍並に中央軍部に致し研究を願つたと云ふ事もあるさうだ」⁴³という。それを信じるなら、1933年に中川総督と軍部の間に「皇民化」の公文書の往復があった。小林総督も「同様な考へから台湾軍及陸軍中央部と話し合つた事もある」として興味津々である。しかし、結局その在任中「軍夫」をはじめとする「準戦時動員体制の基盤が形成されていた」⁴⁴にすぎない。それに対して不満を抱いたのは皇政会である。「外地徴兵令実施に就き代表山下好太郎(略)を上京せしめ二十四日午前十時より首相、陸相、海相、拓相、企画院総裁を歴訪、左記建白書を手交陳情した」⁴⁵と報じられるように、皇政会は台湾人の国民皆兵政策を遊説すべく第一線に乗り出した主唱者である。やがて、1942年に募兵制、1945年に徴兵制が実現するようになった。表1のように、歴代総督の施政はますます皆兵制を旨とする「皇民」の本義に合致しつつある。もし鎌田に霊があって1945年の成果を眺めたら、愁眉を開けるのではないだろうか。

【表1】皇民化運動三段階

形態	「部報」 ⁴⁶ の分類	「国民皆兵」の原義	実施年	皆兵との距離
軍夫召集	第一歩の前の準備段階	正式の兵ではないが、それに近い	1937	△
志願兵制度 施行	「六百万島民は真に名実共皇民たるの第一歩を画するに至つた」	正式の兵籍があるが、まだ少数に限られている	1942	○
徴兵制度 施行	六百万島民は真に名実共皇民たるの第二歩	全面的に兵籍が与えられる	1945	◎

40 「建白理由を総督に説明 皇政会代表が」(『台湾日日新報』1936.11.16, 朝刊)。

41 「漢文欄の廃止に就いて 島内四日刊紙の申合」(『台湾日日新報』1937.3.1, 朝刊)。

42 「台湾工業化に全力 南支開発も計画 昨夜入京 小林総督語る」(『朝日新聞』1939.5.20, 朝刊)。

43 「皇民化が徹底すれば識者は黙つて居まい台湾の志願兵制度につき小林総督が記者団に語る」(『台湾日日新報』1938.1.23, 朝刊)。

44 檜山幸夫「近代天皇制国家の台湾統治——台湾人戦死者の靖国神社合祀問題を事例に」(李玉瑾編『近代東亜中の台湾国際学術研究会論文集』新北：台湾図書館, 2013), p.184。

45 「外地徴兵令の実施を建白皇政会代表各省を訪問陳情」(『台湾日日新報』1941.7.25, 朝刊)。

46 文教局社会課「大君の御楯とならむ 勤行報国青年隊 志願兵制実施を控へ 皇民錬成に一路邁進」(『部報』第132号, 1941.10.15)。

5 戦犯の遺詠

「虎尾鎮公所勸導 民間祖先牌位上 除去「皇民」字様」⁴⁷という記事からすれば、祭祀の現場における「皇民」の字面は1960年代までは残っていたと見える。すると、皇民短歌は果たして1945年8月15日以降完全に姿を消したのだろうか。巢鴨遺書編纂会(編)『世紀の遺書』⁴⁸の「戦犯死没者名簿」には台湾出身者24名がリストアップされている。掲載された九通の遺書を一読すると、定型の短歌を残した二名の遺詠を見出し得る。

まず、1946年8月30日に濠洲ラバウルで処刑された台中出身の元陸軍軍属林江山(日本名: 林義徳)の次の辞世短歌⁴⁹を検討しよう。

^(a)御国に捧げまつらん若桜こゝ^(b)「ラバウル」に^(c)今ぞ^(d)散り行く^(e)

謡曲「賀茂」における「御国」⁵⁰のルビに従えば、初句は五音からなるため、一首は定型のとおりである。森岡清美によると、「遺書や辞世の場合、文例があつたり(略)軍隊内で許容されあるいは手本とされた型どおりのレトリックを用いて記される」⁵¹ものがあるという。もし林の歌に手本があったとすれば、どのような文献だろうか。管見によると、「靖国の英霊に捧ぐ能「忠霊」」(『朝日新聞』1941.11.12. 夕刊)と報じられた「忠霊」に留意すべきである。謡本⁵²の一部と比較してみよう。

- ・上歌：自づから春の手向の桜花。^(c)
- ・ワキ：(略)花と散りにし忠霊の御心如何におはすらん。^(b)
- ・地：その上靖国と齋はれて、御代万代に動きなく。(略)今は皆令満足たゞ有難き極みなり。^(d)
- ・シテ：(略)御国のために命さゝげむと。^(a) ^(A) ^(A) ^(B)

見ての通り、(a)は(A)の動詞句と一致しており、(b)の「ん」は(B)の「む」を口語化した結果である。また、植物+副詞+動詞という修飾構造もほぼ同様である。したがって、一首は謡曲をもとに創作したものといえる。刑死された後、林も「忠霊」として仰がれたいとする気持ちが伝わってくる。

なお、上句の動詞用法については、「勝ちぬく誓」⁵³における「みたみわれ大君にすべ

47 『民声日報』1962.4.14. 朝刊.

48 巢鴨遺書編纂会(編)『世紀の遺書』(巢鴨遺書編纂会刊行事務所, 1954第四版), pp.53-54.

49 巢鴨遺書編纂会(編)『世紀の遺書』(巢鴨遺書編纂会刊行事務所, 1954第四版), p.545.

50 小山弘志ほか校注・訳『謡曲集1』(小学館, 1997), p.62.

51 森岡清美「研究資料としての戦没者の既刊手記」(『淑徳大学研究紀要』第29号, 1995.3).

52 「附録」菱刈隆『忠霊塔物語』(童話春秋社, 1942), pp.262-265.

53 『台湾産業組合時報』第13号, 1943.10.

てを捧げまつらん」と全く同じである。ゆえに、林の遺詠は「皇民」を称揚する「勝ちぬく誓」と、皇楯が君国のために犠牲になった「英霊」を顕彰する時局能『忠霊』を同時に引用して成立したものと観取できる。

次いで、1948年6月22日にジャワのグロドックで処刑された高雄出身の元陸軍軍属董長雄(日本名：玉峯長雄)の遺書(1948年2月19日付)の一部と辞世の二首⁵⁴だけを取り上げよう。

- ・一前略一本職ハ台湾人デアル。(略)ソシテ国家ノ所属ガ変ツテモ、本職ハ日本人トシテ死ンデ行キ度イノデアル。(略)最後ノ御願ヒニ将来大日本帝国ガ復興セバ、ドウカ本職ノ一子董英明ヲ政府ニ於テ日本教育ヲ恵ミ給ハラシマフ御願ヒ申シ上ゲマス。
- ・^(a)惜^(b)まれて^(c)吉野の花の^(c)散る如く^(d)散らましものを^(e)ますらを^(f)吾は
- ・たわけ奴の撃つ十発は男の子吾が胸板貫くも^(f)まことは貫けじ

遺書を検討する際に、陳火泉「道」における稚月女⁵⁵の「皇民への道といふは、死ぬことと見附けたり」を吟味すべきである。それは江戸時代の代表的な武士道論書『葉隠』⁵⁶の「武士道と云は、死ぬ事と見付たり」を引用した結果だと指摘したい。その武士道の死生観を持つ「皇民の道」の定義に従えば、董が表明した「日本軍人トシテ死ンデ行キ度イ」という決心はすでに「皇民」兼「武士」である気魄を示しているといえよう。

短歌のほうも、武士の文脈をぬきにしては、その境地は語れない。第一首の場合、「ますらを」という和語がある。鹿持雅澄『万葉集古義第3巻』⁵⁷の「^{アスラフ}武士」という訓読法に則ると「武士」という董の自己認識が確かめられる。また、それ以外の歌語の詠み方を見ても、『葉隠』⁵⁸を見過ごせない。それによると、「吉野の花見」という記述と中野奎之助の扇歌「^(A)をし^(C)まるゝ^(B)時^(B)ちりてこそ世の中の花も花なれ人も人なれ」がある。第一首と較べると、「吉野の花」ととどまらず、(a)(b)(c)もそれぞれ(A)(B)(C)を踏襲していると指摘したい。ならば、(c)の「散」という動詞の反復法も(B)と「人」との同語反復に触発されて成り立った可能性がある。歌心を見ると、花も人も惜しまれて散るべしとする扇歌に対して、花に喩えた武士も惜しまれて散ればよいのだという希望を託する董歌がある。言葉の引用と比喻・反復修辭法からすれば、董歌は扇歌を本歌取したもののだといわざるをえない。

第二首の場合、冒頭の名詞は多摩叢書第27篇⁵⁹の「^{たわけめ}戯奴^{フルフロツグ}よ牛蛙は藻畳にあぎとま白く

54 巢鴨遺書編纂会(編)『世紀の遺書』(巢鴨遺書編纂会刊行事務所, 1954第四版), pp.738-739.

55 『文芸台湾』第6会-第3号, 1943.7.

56 相良亨ほか校注『三河物語 葉隠』(岩波書店, 1974), p.220.

57 鹿持雅澄『万葉集古義』第3巻(吉川半七, 1898), p.123.

58 相良亨ほか校注『三河物語 葉隠』(岩波書店, 1974), pp.342-349.

59 泉甲二『白き秋：歌集』(研究社, 1947), p.164.

鳴き響^{とよ}みつ」と共通している。そのため、多磨短歌会の主宰者から調査すべきである。「特殊潜航艇のことを聞きて」⁶⁰を題とする北原白秋の第3首「わき知らに人の胸^(E)板^(F)うつものはただにひたぶるのま^(D)ことなるなり」と比べると、名詞(e)(f)の対照と動詞(d)は(E)(F)(D)と一致している。「九軍神」の散華を謳歌する白秋の肉体的な(E)および精神的な(F)からなる構造をそのまま導入した結果、董の歌が出来たと思われる。軍神として散りたいとする董の気持ち^(c)が理解できる。そうした軍神を褒め称える軍歌として、「闘魂燃ゆる「必勝歌」二度目の国民愛国歌決る」(「朝日新聞」1944年12月22日)が想起できる。その第一段に、「今日よりはかへりみなくて大君のしこの御楯といでたつ我はああ防人の昔よりみ^(b)たみ我等の雄心は」とあり、第二段に「天皇の御楯と誓ふ真心は留めおかましいのち死ぬともああ陸海に大空に高く雄叫ぶ軍神の後にぞ続く我等また」とある。第一段の場合、下線部は4373歌、波線部は996歌を引用する万葉の政治利用態勢が見える。第二段の場合、「皇楯」=「軍神」という描き方が認められる。白秋の軍神短歌を踏襲したかには、董も真個の皇楯といわざるをえない。

なお、比喩法に関しては林の「桜^(c)」と董の「花^(b)」を合わせると、桜花である。馬場豊二『皇民練成弓道指導書』⁶¹の「武士道と桜」という章のもと、「他の花の如く幾日も梢に執着してゐるのと異つて、我國民より愛賞されてゐる点も、此処にあるので、武士は精神的に冥合し、花は桜木、人は武士と呼ばれるに至つた」という説明がある。二面の皇楯と化した兩人の遺詠は、結局武士道の風合いを持たせたものと位置づけられよう。

6 日本人の憶念と台湾人の反省

鎌田正威の墓誌銘について補足すると、短歌結社「八雲会」の経歴を記入すべきである。なぜなら、主宰者である井上孚麿の「敷島の道は、皇国の、すめらみ民としてのまことの心を歌ひあげべき」⁶²という理念のもと、「皇民」の真誠を短歌で示すべく、鎌田正威と土屋米吉と向山セツ子らが馳せ参じて出詠していたからである。鎌田の場合、「島の民も岐美二柱のすゑなれば踐ませざらめや神のまみちを」⁶³という歌がある。台湾人も造化二神の末裔なので神の真道を踐ませないだろうか、そんなことはしないという。これは注38で既述した、皇民化運動啓蒙期において惟神道の禊を台湾人に体験させたうえで同化の成功例を詠んだものにほかならない。また、市川清一郎「鎌田正威君の追懷記」⁶⁴における「大君のみたてとならむ願もてとこよべにても猶いのれ君」という歌から鎌田の宿願は「皇楯」たらしとすることが見える。そのような皇民化初期の実績と

60 北原白秋『牡丹の木』(河出書房, 1943), pp.209-210.

61 馬場豊二『皇民練成弓道指導書』(明治図書, 1941), pp.176-177.

62 乙守たまを「敷島の道をさぐりて」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯, 台湾維新社, 1936), p.140.

63 乙守玉緒編『八雲集』(八雲会, 1937), p.27.

64 市川清一郎「鎌田正威君の追懷記」(佐々波外七編『鎌田正威先生追想録』第一輯, 台湾維新社, 1936), p.71.

「皇楯」の素志を持ったのに急逝してしまった鎌田の霊前に、土屋と結婚した向山が最初の皇民化短歌を発表したのは先述したとおりである。

では、皇民短歌を育む土壌を提供した主宰の場合はどうだろうか。1933年12月23日に生れた皇太子殿下に捧げる井上孚麿⁶⁵の祝歌「たかひかるあまつひつぎのみひかりにひかりそひゆくみたみわれらも」がある。結句は『万葉集』996歌の「皇民我」を踏まえていると指摘できる。皇室の慶事を祝賀するために台湾日日新報が和歌漢詩を公募したところ、日本人や台湾人や朝鮮人なども作品を投稿した。和歌の部の撰者役を務めた井上孚麿⁶⁶の1935年の短歌だが、「賀状の返しに未見の本島人少年に」と題した中に「かくばかりたふとき歌を詠み出でし君はまことのすめらみ民ぞ」という一首がある。台湾人出詠者を「真の皇御民」と賞賛しているわけである。戦後になっても、井上は依然として信念を変えようとしなかった。なぜなら、「台湾人」を「同胞」と見做したうえで、「領土はも他国ともなれみ民はもとはのみたみとわれは信ずる」⁶⁷と詠んでおり、旧植民地の「皇民」を「永久の皇民」と定義づけているからである。靖国神社に入祠された董長雄のごとき亡き「皇楯」を慰めるための称呼だけならともかく、敗戦の苦難を乗り越えた後、生き残った元皇民・元皇楯までも「永久の皇民」と思い込んでいるわけである。

その台湾人永遠皇民論を唱える作を含む歌集の件で躊躇った井上のために、呉建堂（孤蓬万里）の「親切」⁶⁸があったので刊行が決まった、という。呉⁶⁹の「皇民化運動として改姓名許されたるは昭和十六年」と「高校の卒業証書は日本名大田建太郎学者の如し」という歌からすれば、彼は「皇民」政策支持者だったと見て取れる。また、「台北市日治時代在郷軍人編組名冊」⁷⁰というリストにも「呉建堂」が入っている。日本の軍籍を授けられた以上、「皇楯」だったともいえる。しかし、呉建堂『孤蓬万里半世紀』の「人権を重んずる見地から、植民地は将来再びあってはならぬものであり、今更日本の植民政策を云々しても仕様がな」⁷¹という主張に従えば、戦後の呉は皇民化運動を含む植民地支配を非難するようになった。その呉主宰の考え方と同調するように、皇民を批判する短歌が現われた。

例えば、1978年11月の歌会に蔡松濤「御民われ活けるしるしなどなかりけり無茶なる戦さ足かけ九年」⁷²がある。『万葉集』996歌を本歌取しつつ、元来の皇民肯定論を否定論に改める創意が認められる。敗戦と日中国交正常化のせいで、日本が台湾をいわば二連捨した事実を鑑みても、本歌取の逆用が諷刺されるであろう。戒厳令が解除された後、

65 『続雲のゆきかひ』（井上孚麿先生歌集刊行会、1980）、p.167。

66 『続雲のゆきかひ』（井上孚麿先生歌集刊行会、1980）、p.224。

67 『続雲のゆきかひ』（井上孚麿先生歌集刊行会、1980）、p.277。井上孚麿『望南集』（青々会出版部、1972）。

68 「はしがき」『続雲のゆきかひ』（井上孚麿先生歌集刊行会、1980）、p.3。

69 孤蓬万里編著『孤蓬万里半世紀』（集英社、1997）、p.80。

70 黄漢夫、1948年11月30日。台胞被日本徵服兵役案。国家發展委員会檔案管理局。2019年8月6日閲覧。
<<https://aa.archives.gov.tw/archivesData.aspx?SystemID=0000390872>>

71 呉建堂『孤蓬万里半世紀』（呉建堂、1978）、p.3。

72 「御民われ活けるしるしなどなかりけり無茶なる戦さ足かけ九年」（『台北歌壇』第53号、1979.2）。

游来乾⁷³の「皇民化化け足らぬとて五十年後尚も短歌詠む芋つ子の馬鹿」もある。皇民化の余燼といって戦後半世紀経っても創作活動を継続する台湾歌人に猛省を促す歌も登場した。

なお、黄得龍⁷⁴の「異族にて唄わされたり「大君の辺にこそ死なめ」まこと幻」と「大君の辺にこそ死なめと召されども君高高と近寄り難し」がある。『万葉集』4094歌を批判的に引用しつつ、傷痕を負った台湾人学徒兵として、いわば皇楯の実体験に基づいて歌詞内容そのものの虚仮を告発するような力作も1990年代に発表された。

7 おわりに

以上のように、皇民化運動政策が形成された世相の背後には歌人達が関与していた。鎌田正威を慰霊すべく発生した皇民化短歌だが、1948年の台湾人戦犯遺詠に皇民短歌の下限が求められるはずである。戦後、台湾人を永遠の皇民と看做し続ける元台北帝大教授の歌に対して、台湾人歌人は短歌をもって反撃したのである。

靖国神社第65回「みたままつり」ポスター(2011年7月)に「英霊(みたま)に感謝と祈りの夏祭」とある。それに従えば、異民族の台湾人を改造する皇民化運動は結局「皇民(御民)→皇楯(御楯)→英霊」化したものである。仮名で読むと、「みた(み→て→ま)化運動」といえよう。漢字でいうと、「皇(民→楯)化運動」もしくは「御(民→楯→魂)化運動」と略称してもいい。

参考文献

- 山崎馨(1980)「万葉集歌三首贅注」、犬養孝博士古稀記念論集刊行委員会編『万葉・その後：犬養孝博士古稀記念論集』東京：塙書房、p.232. Yamazaki, Kaoru(1980) Manyosyu sansyu zeityu ; *Manyo sonogo* ed. Inukai Takashi hakushi koki kinen ronsha Publication Committee, Tokyo : Hanawashobo, p.232.
- 井上孚磨(1980)『続雲のゆきかひ』(井上孚磨先生歌集刊行) Inoue, Takamaro(1980) *Zoku Kumo no Yukikahi*, Tokyo : Inouetakamaro Sensei Kashi Society.
- 皇政宣揚会編(1936)『真の叫』(皇政宣揚会). Koseisenyoukai(1936) *Sin no Sakebi*, Taipei : Koseisenyoukai.
- 孤蓬万里編著(1994)『台湾万葉集』(集英社). Koho, Banr(1994) *Taiwan Manyosyu*, Tokyo : Shueisha.
- 蔡錦堂(2007)「再論「皇民化運動」」『淡江史学』第18号、p.232. Tsai, Chin-tang(2007) Discourse Further Upon the Kōminka Movement, Tamkang History Review Vol.18, p.232.
- 佐々波外七編(1936)『鎌田正威先生追想録 第一輯』(台湾維新社). Sazanami, Toshichi(1936) *Kamada Seii sensei tsuisouroku*, Taipei : Taiwan Ishinsya.
- 果鴨遺書編纂会編(1954)『世紀の遺書』(鴨遺書編纂会刊行事務所、第四版). Sugamo Isho Hensankai(1954) *Seiki*

73 「二月台北歌会詠草」(『台北歌壇』第117号、1995.5).

74 黄得龍『椰子の木』(自費出版、1993)、pp.82-213.初出：『新日本歌人』1990年2月と同1992年1月。

- no isho*, Tokyo : Sugamo Isha Hensankai Kanko Jimusyo.
- 土屋米吉 (1936)『台湾第一回選挙の考察』(普泉社, 第二版). Tsuchiya, Yonekichi (1936) *Taiwan dai ikkai senkyo no kōsatsu*, Taipei : Fusensha.
- 若林正丈 (1980)「大正デモクラシーと台湾議会設置請願運動」, 春山明哲ほか編『日本植民地主義の政治的展開 : その統治体制と台湾の民族運動 一八九五—一九三四年』, 東京 : アジア政経学会, p.229. Wakabayashi, Masahiro (1980) Taisho-Democracy and The inaugurating national diet movement in colonial Taiwan ; *The Political development of Japanese colonialism* ed. Haruyama, Meitetsu, Tokyo : JAAS, p.229.
- 編著者不明 (1936)『奥津城建設報告書』(鎌田正威先生墓碑建築事務所). Author unknown (1936) *Okutsuki kensetsu hokokusho*, Taipei : Kamada Seii sensei bohi kenchiku jimusho.